

【東京都社会福祉協議会会長賞】

愛は奇跡を…

吉田 邦子

自分の家には決して起こらないと思っていたことが、ある日突然一本の電話で知らされたのは今から16年前の2月でした。母が倒れたというのです。「くも膜下出血」でした。それまでの母は「倒れて後病むの精神」と子どもたちを叱咤激励して元氣印そのものの人でした。好奇心旺盛、旅行大好き、美味しいもの大好き、美的センスが良く、趣味多様な人でした。子ども心に「よそのお母さんは弱くて気の毒」と同情さえしていました。

休暇を貰い駆けつけた高次救急センターの集中治療室で母を見るまで、それが現実だとは実感できませんでした。一日の限られた面会時間に幾度も母に呼びかけました。遠方にいる母のきょうだいも駆けつけ連日面会に行き、暗い気持ちで家路につきました。東北の2月は一年で一番寒い季節です。前日茶会に行き寒かったことや、私たちには知らない母のストレスが重なったことが原因でしょうか。医師から「先天的に頭部に数個あつたものが破裂」したものと聞われました。倒れて救急車に乗る間そのままの状態だったら良かったのに、倒れ嘔吐したものを掃除したため

に、脳に血が充満してしまったというのです。母親らしい一面でしたが、事態は最悪でした。それでもなんとか持ち直して一般病棟に移ることが出来たのは一月くらいしてからでした。その時医師から「治ったとしても、家族のことは勿論何もわからないかもしれないかもしれませんが。私と姉は東京で勤めていて、実家には妹と80歳の父がいました。仕事を休むわけにはいかず、完全看護とはいえ家族の付き添いが必要でした。困り果てている時、幼い時「お婆ちゃんが年をとってきたなくなったら、新しいお婆ちゃんを取り替える」と言っていた甥が大学の始業式まで「俺でよければ…」と、母の付き添いを承諾してくれました。地獄に仏、当てにならない、頼りにならないと誰もが思っていた甥が、どんなに寒い朝でも早く、母の朝食に間に合うように黙々と病院に出かけてくれました。そして、食事の世話からリハビリ、検査の付き添いなど、「男のお子さんなのに感心ですね」と言われるほど熱心に看病してくれました。病院の紹介で東北一と言われるリハビリセンターに移動する時も付き添ってくれました。

リハビリセンターは家から遠く、勤めていた私たちは土日しか行くことが出来ませんでした。行っても数時間滞在で直ぐ帰らなければならず、帰りには泣き泣き帰りました。その間付き添いさんの費用もまた大変でした。基本料金のほか夜間料金といって40万円ほどかかりました。その他に病人が食べたいといっていると食べ物、衣服は…と、お願いしている身としては要求通りするしかありませんでした。

数ヶ月しても母の状態は良くなり、次第に表情もなくなり、よだれを流すようになっていき

ました。「駄目なら家の近くに」と姉妹で話し合い、帰省の度にあちらこちらと施設を見て回りましたが、母を預けるに適した施設は見つかりませんでした。捜しつかれて家に帰ろうとバスに乗りました。後一停車で家というときアナウンスの「…老人介護施設前」とを聞き急いでバスを降りました。生まれつきの土地の子ではない私たち姉妹は実家のある土地が不案内で、家から25分ほどの所に老人介護施設があるのを知りませんでした。その施設はクリニックの二階と三階が病室になっていました。介護士さんのピンクのユニホームは明るく、イメージがとても希望的でした。ラッキーなことにはちょうど空きベッドがあったのでセンター長さんは話を聞くと「直ぐに連れていらっしゃい」と暖かく言ってくれました。リハビリ・センターからの移動の時、私は仕事でいけないのでまた甥に頼みました。甥は快く引き売ってくれて姉たちと母の老人介護施設までの移動を手伝ってくれました。

その施設が家に近くなったこともあり昼食の介添えに父が、夕食の介添えに妹が会社の帰りにより、毎日通ってくれました。また、センターの介護士さんやセンター長さんが心配りを見てくれました。最初は食事を一人で取れない人のテーブルで介助を受けながらの食事をしました。一人で食べられるテーブルに移された時は、皆で大喜びをしました。家の近くに来たこともあり長期休暇の取れる夏、正月、五月の連休には二週間ほど家に帰ることが出来るようになりました。二人の甥達も休みを見つけては日帰りで母に会いに来てくれました。母が帰ってこられるように家をバリアフリーに、電動ベッドやお風呂も母と私たちが一緒に入れるように広く改造しました。

元気な時は70キロもあった母は35キロになっていました。お風呂に入る時、長時間入られないので姉が頭を洗い、私が母をイスにすわらせて支え、妹が身体を洗いました。浴槽には私が母を抱いて入りました。細くなつた母の腕や足を見ると胸が詰まってしまいました。

健康な時から好き嫌いの激しい母でしたが、病気になつてもそれは変わらず、嫌いなものは「死んでもいい」口を閉じて決して食べません。そのために栄養失調になり、本院に入院することがありました。困り果てた施設から「何でも好きなものを食べさせて下さい」と言われたので、東京から毎週母の好物の食料を送りました。特にミカン是一年中三度の食事に欠かせませんでした。ミカンの袋を外すのが思いのほか時間がかかり苦戦の連続でした。食事時に必ず妹が行くので母は待つているらしく、仕事で妹がいけない日でも「娘が来るので」と言つて、食堂で待つていることもありました。それ以来どんなに遅くなつても妹は母の下に行くようになりました。「入所してきた時は余りの状態の酷さに驚いた」とセンター長さんに言われた母も時々家に帰れることがわかり、次第に元気になつて言葉も話すようになりました。「家に帰つてもわかりませんよ」と言われたことを思えば、奇跡としか思われません。「何処かに行きたい」「…が食べたい」と言うようになり、ハイヤーで一時間ほどのドライブやホテルの会食もするようになりました。このまま順調に回復か、と思われた時に持病の「腎盂炎」でたびたび危篤状態に陥り、その度に甥達も駆けつけて、母の手を握り励ましてくれました。寂しがりやの母は家族の顔を見ると不思議と元気になりました。

13年を過ぎた12月、後2日で帰省しようとした日に妹からの電話で母の様態の急変を知らされました。母は食事を取ることが出来なくなり、体力の消耗が著しく、施設にいる医師から「もう駄目ですね」と冷たい宣告を受けたというのです。以前から万が一の時には施設の本院は遠いので、家から10分ほどの所にある国立病院に、と決めていました。藁にもすがる思いで、必死に妹が病院に開いてもらい、受け入れて貰いました。国立に入院した母は精密検査を受けました。幸い院長先生は脳神経外科の医師でした。院長先生から「不思議なことにシャントバルブ、脳の髄液の流量を調節するバルブが外れ用をなしていない。奇跡ですね。くも膜は治っています。ただ、脳梗塞を起こした痕跡がありますが、問題はありません」との暖かい言葉を頂きました。担当医師からは「内蔵に疾患があると思われるが、高齢なので手術はしません。内蔵が大分弱っています。出来るだけのことはしましょう」と言われました。私たちも、「病人が痛がらないように、苦しめないようにしてください」と頼みました。数度の検査で血液も再生不良のことがわかりました。点滴をしていたのですが、余り長いのは好ましくないので食事を用意してもらいましたが、食べることを拒否、とうとう鼻からチューブを入れ流動食に替わってしまいました。子どもとしては口から食べて欲しかったのですが、母の意思が強く諦めざるを得ませんでした。病院に入ってから時々、「落ちる、落ちる。ベッドから降ろして、床に寝せて」と何度もせがまれました。血液が足りなく、貧血を起こしていたので輸血をしました。それから数ヶ月に一回輸血をするようになりました。病院に入り、チューブをつけられてから家に帰ることも、出かけ

することも出来なくなった母は苛立ち、誰彼にとあたることもありました。一度は医師の許可で30分ならと言うので家に連れて帰ることを考え、実行に移したのですが、体が痛い、と車椅子にも乗ることが出来ず、帰宅を断念しました。

国立病院に母が入った頃は姉妹3人共職を離れていました。相変わず妹に負担がかかっていたのですが、私たちも月に一度2週間から3週間実家に帰ることが出来ました。姉と私は再就職を諦め、実家にいる妹と家の事、父のこと、とくに母を最後まで悔いの残らぬ最善を尽くして看てあげよう、と決めました。病院へは毎日2時から3時の間に行き、母の夕食が来るまで病室で母と話をしています。チューブになってから栄養が充分脳に行き亘っているのか、母の会話が增え、冗談を言って笑うこともありました。また時々看護婦さんの人生相談にのりアドバイスをしたり、言葉遊びを私たちとできるようになりました。頭の冴えは以前に戻ったのかと思われるほどでした。

このまま順調に行ったらチューブが外れるか、と思った昨年末、母が突然体調を崩しました。高熱を発して尿がでなくなりました。腎盂炎と思われました。重病人の入るHCUと言う部屋に入れられ、正月の7日の日に医師から、「このままの状態が続いたら、後三日の命と覚悟を……」と言われてしまいました。覚悟を決め、私と姉は日帰り東京に喪服をとりに戻りました。それから、とにかく熱を下げようと水で身体を冷やし、尿を出すべく3人で手足、身体をさすりました。特に足の土踏まずを一生懸命に祈るような思いでさすりました。2日目の日に奇跡的、本当

に奇跡的に尿ができました。喜ぶ間もなく薬害で皮膚と言う皮膚がむけ始め、皮膚や口から血がでて、看護婦さんと呼んでもなかなか来てくれません。雪の中オリーブ油を買いに走りました。頑健に口をあけることを拒んでいた母が、「口のものを取って」と。恐る恐る手袋して口に指を入れると血の塊が溢れ出てきました。取り終わると母は「ありがとう」と。その言葉を聞いた時、胸が一杯になってしまいました。そんな時幼い時「おばあちゃんの子どもになりたい」と言っていた上の甥が、仕事が忙しく、日帰りでしか行けないけれど、駆けつけてくれました。甥は片手で母の手を確りと握り、片手で血の吹き出る母の頬を静かに拭いてくれました。尿が始め、皮膚がむけだし、熱も下がり始めました。それから二日後、正月休で血液があるかどうかからない、と言われていたのですが、母は生の血を二日間に亘って輸血を受けることが出来ました。輸血後は熱がでて、体の皮と言う皮が蛇のそれに似て剥がれ続けましたが、それからはめきめきと回復して一般病棟に帰ることが出来ました。

HCUからの生還者は珍しかったようで、それから病院の他部署の医師や看護婦さんが覗きに来ました。母は今小康状態を保ち、相変わらずどく説をはいたり、可愛い患者さんになったりと、その日その日で変わっています。

この世の中に奇跡があるとしたら、母の場合は「奇跡」そのものです。ある人は家族が一生懸命に尽くしたから、と言ってくれます。私は母の生きたいという気持ちと、私たち家族の「結末」、そしてタイミング良く施設や医師にめぐり合う事が出来た「運」、それからすべてが結果として

奇跡を呼び起こしたのだと思っています。

介護疲れからおきる悲惨な事件が報道されていますが、介護は一人ではやはり無理があると思います。私たち姉妹は3人共独身であったことが介護をする上で或は経済的にも幸いしたのだと思います。一人ではここまで介護は出来ず、母はきつと16年も歳を重ねることは無理だったと思います。この間に母を心配してくれたきょうだい、友人、知人そして最愛の息子が旅立ってゆきました。医師の助言で母はそれを知りません。「知らせない」ことが私たち家族の「つとめ」でもあります。

今年12月で母は90歳になります。今は無事に90歳を迎えることが出来るように、願っています。